

---

**読書好きの少年は、感情移入も人一倍。**

来々

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

読書好きの少年は、感情移入も人一倍。

### 【Nコード】

N4393B

### 【作者名】

来々

### 【あらすじ】

僕は小さい頃から読書が好きで、本を読むうちに、キャラクターの心が分かるようになりました。そして、いつの間にか……………。

……何度やつても不思議な気分だった。  
ページを開いて、好きなキャラクターを思い浮かべる。

……ああ、引き込まれて行く。

僕は、幼い頃から妙に大人びていて、冷静な子供だったらしい。

そんな僕に友達ができるハズもなく、読書だけが幼少の頃の唯一の趣味だったそうだ。

小学一年生の頃から、休み時間は図書室で読書をしていたのを覚えてる。

同級生達が外で元気に走り回っている声を聞きながら、僕は静かに読書をしていた。

二年生になったとき、もう一人図書室の住人が増えた。折れそうな

位細くて、肌が雪のように白い、

……もの凄く綺麗な六年生の子だった。

僕は彼女を見てドキドキした。

今まで、僕と図書委員しかいなかった暗い図書室が、一気に明るくなった気がした。

そして、彼女が図書室にいる事に何の違和感も覚えなくなったある日、

彼女が僕に話しかけてきた。

彼女は去年大病を患い、ずっと入院していたそうだ。もともとクラスでも目立つほうではなかった彼女は、「この入院のお陰で、すっかりクラスに馴染めなくなった。」と言った。

僕は、初めて話しかけてきた彼女にドキドキしたが、「そうなんですか。」と、クールに答えた。

すると彼女は、「君、変わってるね。まるで私より大人の人みたい。」と言って笑った。

それから彼女は、よく僕に話しかけてきた。

何の本が好きか、どんなジャンルが好きか、どの作者が好きか。  
僕がその質問に答えると、彼女はいつも

「大人だね。」

と、笑った。

その、いつもの会話の中に、僕が能力に気付くキツカケとなる会話があった。

「ねえ、君は？」

「はい？」

「君はいつも、どんな風に本を読んでいるの？」

「どんな風につて、普通にですよ。」

「そうじゃなくて、いつもどんな気持ちで本を読んでいる？」

「……わかりません。何かを考えて本を読んだ事なんてないかも……。」

「ふーん、やっぱり大人は違うねえ。……私はね、その本の中で一番好きなキャラクターの気持ちになって読むの。そうしたら、私もその本の中に入った気がして、凄く面白いんだ。」

「そうなんですか。」

「君は最後はいつもそれだねえ。」

そのときは何気なく受け答えしたが、後から考えると凄く感心した。その日から、僕も好きなキャラクターの気持ちになって本を読むようになった。

やがて時が経ち、彼女は小学校を卒業して、また図書室は暗い空間になった。

このときばかりは、さすがの僕も少し寂しさを感じたが、その事よりも、彼女から教わった本の読み方に夢中になって、寂しさは直ぐに忘れた。

そして、六年生のある日、僕的能力がついに目覚めた。

授業中に読書をしていた時だった。

いつものように本を開いて、好きなキャラクターを思い浮かべた時、

突然目の前が真っ暗になった。

僕はいつもでは考えられない程のパニックになり、地面を殴った。

すると、暗闇が一瞬にして見覚えのない街になった。

再びパニックになり、辺りを見回す。

すると後ろから肩をたたかれ、

「どうした？ x ？」

と、今読んでいる冒険小説の、僕の一番好きなキャラクターの名前を呼ばれた。

僕は慌てて後ろを振り返って、

「なんでその名前を知ってるんだ？」

と聞いた。

すると、僕に声をかけてきた筋肉質の男が、こう答えた。

「なんでって、それがお前の名前じゃないか。 x ！」

しばらく唖然となった。しかし冷静になり今の状況を見ると、街はまるで、小説を読んで僕が想像した街そのまま、僕の服装もいかにも冒険小説の主人公のようだった。

僕は自分の置かれている状況が怖くなり、

「帰りたい。」

と、心から願った。

すると再び目の前が暗闇になり、次の瞬間には元に戻っていた。

授業は普通に行われていた。

時計を見ると、暗闇に包まれる前から10秒も経っていなかった。

疲れていて、居眠りをしてしまったのだ。  
と、考えて自分を納得させ、本を開くと、

もう一度、同じ体験をした。

こうして僕は気付いた。

僕には、本の中に入る能力がある。

その後の僕は、何度も本の中に入って自分の能力を確かめた。



僕的能力は、

「本を開いて自分の好きなキャラクターを頭に思い浮かべるだけで、その本の中に、その好きなキャラクターとして入れる。」  
と言う物だ。

この能力を使い、どんなに長い時間本の中にいても、

「帰りたい。」

と願うだけで、元の世界の、それも、能力を使う前の時間に戻る事が出来た。

だが大変な事もあった。

本屋で立ち読みをして、

「あっこれ良いな」

と思ってしまうと、いつの間にかその世界にいるのだ。

お陰で僕は、読書ができなくなってしまった。

そしてある日、

家にあつた、父の愛読書であるホラー小説を手にとつた。

興味が湧いた。

ホラー小説の世界は、どうなっているのか……。

本をパラパラとめくり、死なない様なキャラクターを探して、本の世界に入っていく。

……何度やっても不思議な気分だった。

ここは、どこの場面だろうか。

何だか背中がゾクゾクする。

何か温かいものが体についている。

自分の体を見ると、

ナイフが刺さっている。

ああ……………。

こいつも死ぬキャラクターか……………。

「帰りたい。」

と思ったのに、  
世界が変わらない。

僕は、  
死ぬ……………。

恐い、怖い、恐い、怖い、恐い、怖い。

血が体から出て行く。

意識が遠のく中、最後に母の顔を思い出した。

「…………貴方がいきなり倒れてから、もう十年よ？いつまで黙っているの？起きない。……………」お願いだから……………」

ごめん。母さん。

（後書き）

皆様お元気ですか。

来々と申します。

久しぶりに書いた短編。

なんだか良く解らない物になりました。

次は頑張ります。

ご期待下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4393b/>

---

読書好きの少年は、感情移入も人一倍。

2010年10月25日08時19分発行